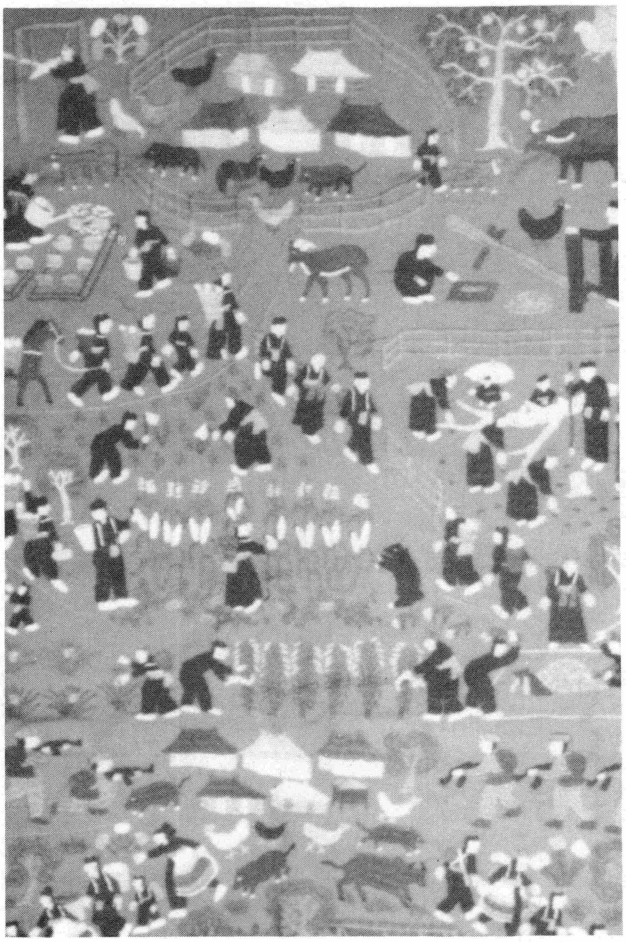
発行日　1989年10月20日発行（毎月20日発行）通巻94号
1982年8月16日第三種郵便物認可
ISSN 0289-6680

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.94

試行錯誤



モン族の生活を描いた刺繍（ししゅう）

特集　ラオスを知っていますか

ラオスを知っていますか …… 2
座談会　ラオスとは長いつきあいになりそう …… 6
わたしたちの力でよりよい村の生活を築いていきましょう …… 10
ラオス母子保健プロジェクト研修生の横顔 …… 12
研修生カンプーさんの活動 …… 13
いんたびゅう　郡司　博さん …… 14
先進国援助とアジア
タイ周辺国の森が狙われている …… 16
ミャンマーは今！　緊張つづく国内情勢 …… 17
新たな難民問題 …… 18

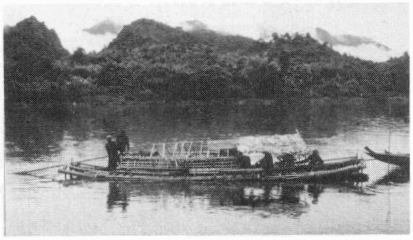
JVC Japan International Volunteer Center

ラオスを知っていますか

JVCがラオスに初めて足を踏み入れてから2年がたちました。プロジェクトの報告はこれまでも何度かこの誌上でしましたが，これからわたしたちが長く付き合っていくことになるラオスという国については，改めて紹介したことはありませんでした。今回ラオス特集号を組んだ機会に，ラオスとJVCのラオス・プロジェクトを写真をふんだんに使って紹介しようと思います。一度訪れたら決して忘れられないと誰もが言うこの国を，少しでも身近に感じてもらえればと思います。

Ⅰ＜アジアの桃源郷＞

ラオスはベトナム，タイ，中国，カンボジア，ビルマに囲まれた内陸国です。ラオスは東に安南山脈，北に雲南山脈，西はシャン高原の山々に囲まれ，西南部タイとの国境は「母なる川」と呼ばれるメコン川の長流に抱かれています。
国土の8割が山地で，日本の本州とほぼ等しい面積23万6800km^{2}に，静岡県の人口ほどの約360万人しか住んでいません。



国土の南方部分は熱帯，北方部分は亜熱帯に属し，5～10月の雨期は豊かな雨と強い太陽熱，11～4月までの乾期には大陸からの北風が暑気を和らげます。
このような自然条件は豊かな植生をうみ，生活に好適なリズムを与え，質素ではあるが，おだやかでのどかなラオスの人々の生活を育んできました。

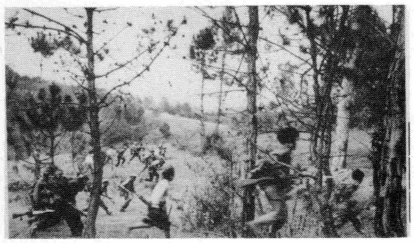
今日，ラオスを訪れた人は必ず言います。「なんと素朴で明るく優しい人たちだろう。現代の世界に残された最後の別天地ではないだろうか」と。
日本人ならば，この国の人々の顔かたちが似かよっていることや，稲作文化や仏教文化の源流に近いこともあいまって，そこはかとない親近感を抱くのです。

現在，ラオスには多数民族のラオ族をはじめ，カー族，モン族，ヤオ族など68の少数民族が存在し，それぞれ独自の言語やすばらしい伝統をもっています。

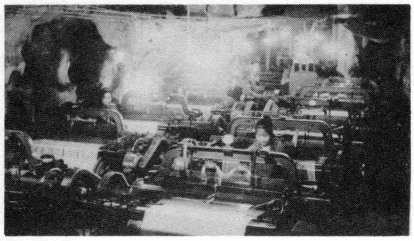
Ⅱ＜ラオスの歴史＞

しかし，こうしたラオスにも悲しい歴史がありました。タイやベトナム，ビルマという大国にはさまれたラオスは，1353年の建国以来たえずこれらの国の政治的，経済的干渉に翻弄され，時には分割統合されて国がなくなってしまった時期もしばしばありました。
19世紀後半になると，フランスはベトナムとカンボジアでの植民地支配をより安定したものにするため，戦略的な位置にあるラオスに触手を伸ばしはじめ，1899年ラオスを植民地としました。

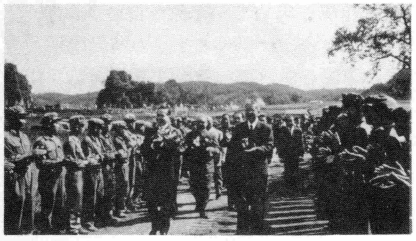
フランス植民地下では，各民族が互いに敵愾(がい)心や憎悪を持つようにしむけられ，民族分断の統治が行われました。また，苛酷な税金や賦役を強制したこともあって反乱や蜂起が頻発しました。
1945年には日本軍のもとで一時独立しましたが，日本の敗戦により，再びフランス政庁が復帰しました。（写真はヴィエンチャンの凱旋門）



しかし，一度呼び覚まされた独立への自覚は，その後激しい反仏独立運動となってあらわれ，長い解放闘争の結果，1954年ラオスはやっとフランスからの独立を達成しました。
しかし，これ以降，ラオスは政権をめぐって左派，右派，中立派が対立し，東西両陣営の代理戦争の様相を強めつつ長く不幸な戦乱の泥沼に落ちこんでいきます。



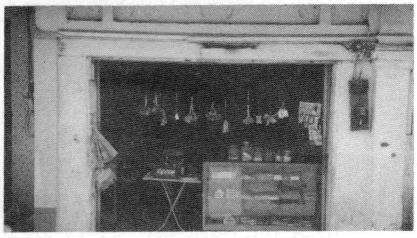
特にアメリカは，インドシナ半島における共産化の防波堤としてラオスを重視し，ベトナムとともにラオスに強力に介入しました。（写真は解放区の洞窟内の工場）
こうして1973年の停戦まで，25年間にもわたりラオス国内は戦火にさらされ国は荒廃し，多くの避難民を生みました。



戦乱はパテト・ラオ（ラオス愛国戦線）に有利な形で終わり，1974年4月には王国政府との間に連合政府が成立，さらに1975年の12月には王政が廃止されて社会主義のラオス人民民主主義共和国が成立しました。

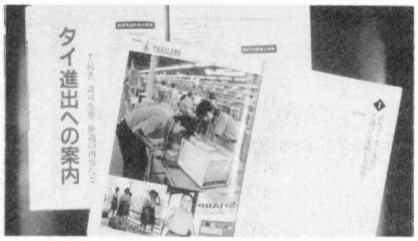
内戦時，何万人もの人々がタイなどに移住してしまったのに加え，75年の革命後はまず反対勢力だった人たちに続いて，村がさびれて食べられなくなった人たちが難民となって30万人以上も出ていってしまったのです。
（写真はバンビナイ難民キャンプ）

Ⅲ＜ラオスの苦痛＞



こうして国全体が過疎化し，人材不足に陥った新生ラオスの建設は困難を極めました。
さらに，1975年以降，社会主義政策をとってきたラオスは，西側諸国からの経済援助が制限されたこともあって経済が行き詰まり，現在，世界で最も貧しい国の一つとなってしまい，国家公務員の給料すら遅配せざるをえない状態です。

農村は特に貧しく，その上保健衛生，栄養，育児，農業の分野でも立ち遅れています。JVCがヴィエンチャン近隣3県で行った調査によれば，26%以上の子供が5歳未満で亡くなっています。

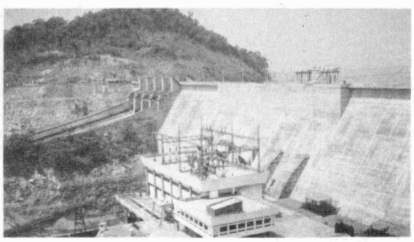


隣国のタイでは，近年目覚ましい経済発展が進み，1986年の1年間だけで日本の企業が204社も進出しました。首都バンコクの夜景は，日本の都市と変わりません。
しかし，そのタイも一歩農村に目を向ければ，貨幣経済の進出によって伝統的な農村は崩壊し，経済成長が始まってからのほうが，売春婦の数が増えたという皮肉な現実もあるのです。

自国の森林を輸出用材木や，先進国の飼料用作物であるキャッサバやトウモロコシ栽培のために失ったタイでは，それが大規模な洪水をひきおこす原因となり，すでに自国の木は切れなくなったため，いまラオスの森林資源に注目しています。
今，ラオスに日本やタイ，NIES，欧米などの物や金が津波のように押し寄せてきたら，環境破壊と貧困で，タイの農村のようになることは目にみえています。

資本主義膨張経済は，より大きな成長と市場を求めて，資源を食いつぶすべく周辺に広がりつつあります。(写真はラオスのボーリーカムサイ県の開発現場)
ラオスでは今，ソ連やベトナムの改革の影響を受けて，社会主義経済の自由化への政策転換が，驚くべきスピードで進んでいます。同時にタイは，カンボジア問題の解決をにらんで，ラオスを含むインドシナ三国を，戦場から資源と商品の市場に変えようと働きかけています。

実際に，ラオスの首都ヴィエンチャンの近郊では，換金作物としてキャッサバやたばこ，カシューナッツなどが作られはじめ，農村の自給自足的な生活を変えようとしています。食糧の自給もままならない貧しい農村が，一気に国際市場経済に巻き込まれていく過程がみてとれるようです。
(写真はヴィエンチャン市郊外の村でテレビに群がる村人)



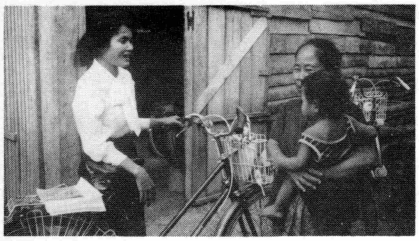
電力と木材くらいしか外貨獲得品目をもたないラオスでは，環境破壊を恐れ，ためらいつつも，乱伐への規制を徹底できません。
日本の援助によりナムグムダムが建設され，また森林は，かつての国土面積の68%から47%へ減少しましたが，今もなお，新しいダムの建設や木材切り出しのため，道路や橋の建設が進んでいるのです。

Ⅳ＜JVCのめざすもの＞

インドシナ難民問題へのとりくみから始まった私たちJVCの活動は，多くの議論と試行錯誤をへて，より根本的な解決のために，難民の母国において難民を出さない国づくりをめざす活動へと拡がってきました。
農村開発のための最初の活動として，JVCはラオス婦人連合と共同で女性生活改善指導員養成プログラムをはじめました。

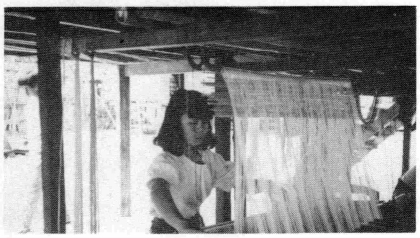
88年7月にラオス婦人連合との間にプロジェクト合意書を交わしたのち，JVCはヴィエンチャンに指導員の養成センターを建設し，養成プログラムのカリキュラム作成のための農村実態調査を実施したほか，プロジェクトにラオス保健省，農業省，教育省の協力を取り付け，また国連のUNDPやUNIFEMから向こう3年間のトレーニング資金援助の合意を得ました。

プログラムの内容は母子保健，栄養，育児などの分野で，村の女性の生活改善を指導する指導員を養成するものです。指導員は，これらの分野の知識を村の生活改善という観点から，総合的に学ぶことになりますが，今年度の指導員には母子保健，来年度の指導員には農業を中心に養成を行います。



指導員たちは教科終了後，村を巡回して普及活動を行います。また巡回時にぶつかった問題や疑問を，3カ月後に再度養成センターにもちかえってお互いに議論しあうほか，タイの村起こしの活動を研修するためタイへスタディーツアーに行くことにもなっています。

6月22日に始まった第一期のトレーニングは10月半ばに終了します。研修生が生活改善指導員となって出身地域の村にかえったあと，JVCの看護婦の原田さんらが彼らを追って村を回り，母子保健を中心とした生活改善の活動に参加します。



ラオスの農村社会が伝統的な貧しさを克服し，平和で安定した生活を続けていくためには，農村の自立がまず確保されなければなりません。それには，村レベルから生活改善の指導者が出て，村の人々が自信をもって創造的な村づくりがなされなければなりません。
JVCはラオスのもっている伝統医療，手織物，自然との共存の仕方，相互扶助のシステムなどの豊さを大切にしながら，彼等の求めている食と健康における安全性を，長期的な展望をもって達成することをめざしています。

＜写真協力＞日本電波ニュース

座談会　ラオスとは長いつきあいになりそう！

星野 昌子(JVC特別顧問)　本田 徹 (医師、SHARE代表)
東村 康文(JVCボランティア)　谷山 博史(JVCラオス代表)

初めてのラオス

谷山　今日は最近ラオスを訪れた3人の方にラオスの現状とラオスプロジェクトに期待することをお聞きしたいと思います。まず星野さんからラオスにかかわるようになったきっかけを聞かせて下さい。

星野　協力隊の第一期生でラオスに派遣されたのが最初です。その前に，学校を出てから9年くらい専業主婦をしていました。しかし父親が出世すれば家中が幸せになるという日本の家庭のシステム，これはトリクル・ダウン・セオリーという世界の開発の方法とまったく同じで，いろんな違いのある者が豊かな共存の輪の中から大きな力を出していくというのではなく，小さい者，弱い者を踏み台にして父親が偉くなるということですが，それが私には耐えられず離婚したわけです。私にとって再び生きる力になったのは，ラオスでホームスティした家で，そこには知恵遅れの子もいたんですが，みんながそれぞれ生かされながら共存する姿がそこにあったんです。そこから第三世界の人間性の豊かさみたいなものに勇気づけられたというか，なんか生き返ったような気持ちになったんですけど，それがきっかけです。

本田　カンボジアには3年くらい前から保健のプロジェクトなどで関わりを持っていたのですが，今度ラオスでも小さい保健のプロジェクトをやるというので見に行きました。ほんの一週間の短かい旅行で，ヴィエンチャン市内が多かったんですが，1日だけヴィエンチャン県のポンホーンとケオウドムを見てきました。

東村　JVCに関わり始めたのは1年前からですが，第三世界との関わりは3年くらい前フィリピンに旅行して非常に強い衝激を受け，自分自身何かをしなければならないと感じたことから始まります。そしてJVCの国内活動をしていくなかで，僕としてはラオスに一番ひかれたんです。それは非常に素朴ないい国で文化も高いということを谷山さんから聞いていて，そういう国の人のために何かしてあげたいと思ったからです。僕自身の専門からいうと環境問題に関心があるんですが，現在ラオスにも世界経済の波が押し寄せてきて，具体的に言えば森林伐採という形で現われていますが，その辺の関心を持ちながら今回，谷山さんと7月に2週間ほどラオスに行かせてもらいました。

変わりゆく社会

谷山　ここで簡単にラオスの近況について説明したいと思うんですが，ラオスは今社会の大きな転換点を迎えています。30年続いた内戦が1975年の社会主義革命で終結を見たものの，革命の進行に伴って現在までに30万人以上のラオス人が難民となって国を出ました。社会の再建のために人材と資金を最も必要としている時期に難民流出と西側諸国の援助制限に直面したのです。今，人材不足と経済政策上の失敗が重なってラオスの経済は行き詰まってしまいました。そして社会主義経済の自由化への政策転換が驚くべきスピードで進行しています。主にタイを通して西側諸国からの商品・資本・風俗が急激にラオスに浸透しています。半面，全国平均でも5人に1人の子供が5歳までの間に死んでしまうという貧しさがあります。こういうラオスの状況について星野さんはどう見ていられますか。

星野　私が行ったのは2年ほど前で，その時タイの商人が商品を舟に積み込んだり，向うからも運び出したりしているのによく出くわしたんですが，自由化することによって，本当に必要ではないものも持ち込まれている，営利目的の活動が進んでいると感じましたね。ラオス人は競争心とか物欲は弱いですよね。非常に上品で物や金めあてじゃなしにいろんな行為をする。だから人間の悪い部分，欲を中心に動いていくものに対して抵

星野　昌子さん

抗力がない。社会主義というものは少なくとも，物欲や金銭欲というものをコントロールしようとします。自由だということは何でも精神にコントロールをかけないという形で入ってくるから，ああ，抵抗力のない人がこれじゃやられちゃうなと思うわけです。

本田　一週間しかいなかったので表面をなでただけなんですけれども，道を歩いていると食べものでもテレビの番組でも，川を越えてタイのものがたくさん入っている。それが少なくともヴィエンチャン近郊の人たちのふつうの生活スタイルになっている。一方ではベトナムに向いた顔というものも確かにすごく感じるところがあって，どういうところにラオスの人たちの本音があるのかなと思います。ただ，一人そば屋のおばさんで素晴しい人がいて，タイの商人と結婚したのですが，タイに帰る時に彼女が自分の子供として育てていた2人の甥を連れていくことを拒んだので，そんな薄情な夫と暮らしたくないと，自活の道を選んだのです。だけどすごく陽気でいいおばさんで，そういう人のたくましさを見ていると必ずしもタイ人にやられてばかりはいないんじゃないかという気もします。また政府は全然給料を出せないということで，生きていくには皆さん知恵をたくましくしていく以外ないというところもあります。

東村　基本的に役人も貧しいし，みんな貧しいですよね。それで普通だったらうまく商売をやってもうけて，ということになるのだと思うのですけれども，そこまでガリガリ働かない。

星野　余分に貯め込む必要はないと考えているんですよ。

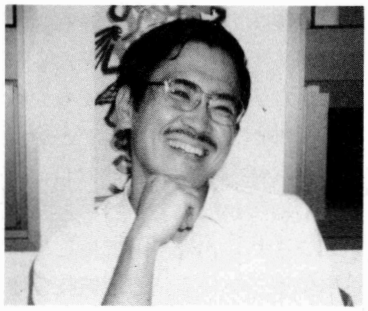
プロジェクトの対象は農村

谷山　かなり外国の商品が入って来て，金を貯めないと生き抜いていけないというのはまだヴィエンチャンとその近郊ぐらいなわけで，農村地帯はまだ自給自足的な生活をしていて物質的なインパクトとはまだ無縁な所なわけですね。JVCが活動しようとしているのは農村なんですが，星野さん，農村の状態はどのような印象を持たれていますか。

星野　ヴィエンチャンに住んでいたので農村の生活体験が欠けているんですけど，私の下宿でも食物は自分で作りニワトリも飼うし野菜もほとんど買わない。でも，とうがらしのとても辛いのとか肉は買ってきたりしましたけどね。とにかく農村的要素は，首都でもありました。ただ彼らのゆったりしたところを支えているのは，日本の本土と同じ大きさに360万人の人口しかいない点ですよね。ラジオの放送で“○○通りの何m^2の土地”とアナウンスをして2カ月間何もクレームがなければ，ただでその人の土地になったりということもあります。そういうなかでは，競争とか人を落とし入れても何かやっていくということは生まれないわけですよ。

谷山　ただ農村にも改善すべき点はあると思うんです。例えば産んでも産んでも子供が死んでしまう貧しさ，新しい商品が入り込んで村が分散していく社会の流れもあります。自分たちの手にゆだねられていた生活が壊されていく。そのような動きのなかで，健康改善の活動から入って，村に力をつけていく必要があるのではないかと思うんですが。

本田　基本的には指導員を養成していくのは良いと思います。ただ車での巡回診療は根づくのが遅いのではないかと思うんですね。小さなヘルスポストでいいからそこをサポートしていく。ユニセフで働いているソンボットさんがファミリーフードプロダクションというのをやっていて，貧しい県の特に農村の人に魚をとる道具を貸したり，種をあげたりして，自分たちで食物を作るための仕出しをする。その中で子供の栄養失調の問題にアプローチしていく。商品作物を作っていくのと違った形の農業を支えていく。長い目で見ると医療保健のためにも役立つのではないかと思います。



本田　徹さん

要求される指導者像

谷山　JVCのトレーニングや指導員の活動は健康面だけにしぼらず農業や教育や環境にも結びつけて考えています。星野さんはプロジェクトのあり方についてはどう思われますか。

星野　ヴィエンチャン市内でもかつてそうだったから農村でもそうだと思うけど，健康についても食物でも生活上のことなどなんでも祈とう師に相談するというしきたりがあるでしょう。例えば，みんな病気でも何でもピー（精霊）のせいにしていく。そしてピーの怒

りを鎮めるためにはどこに祈りを捧げればよいのかというような。そういう祈とう師のやり方が間違っていて新しいやり方でこうすればいいなんて絶対受け入れられないわけね。だから祈とう師とうまく組んでいく。難民キャンプでもやったことがあるんだけど，難民の中から祈とう師を選んで，そしてその人が来てお祈りしている言葉を聞いていると，自分の体を治しているんだなと素直な気持になるんですね。そういう形でじっくりやっていくと今までの伝統的なシステムの中で一番困っていること，彼等自身も逃げたがっていることが見えてくる。例えば，日本でも前はやっていたけど，お産の後21日間は炭の上にいて何も食べないで寝ているとか，彼等もきついと思っているわけ。できたらやめたいなと思っている。でもやめたら子供がうまく育たないとか，いろんな迷信があるわけでしょ。そこで彼等が悩んでいることを相談してきたら，他の国ではこういう風にやっている，と選択肢を増やしてやって，こちらからは押しつけないで彼等の方から変えていくようにもっていく。何事も否定するのではなくもりたててやっていくような事を考えていかないと，指導員が村に行って浮き上ってしまうんですよ。

谷山　前田さん（JVCラオスチームの専門家）なんかもその辺は大変気を使っていて，教える教えられるという立場じゃなく，一緒に行って話しながらひとつの案として解決方法を見つけていく，話し合いの場をもりたてていくという感じで，なるべく押しつけないようにしている。しかしプログラムの内容を見るとファミリープランニングがあったり，離乳食の作り方，農作物の作り方があったり，ひとつの知識として独立してしまう恐れがあるんです。

谷山　博史さん

東村　実際の授業風景は，先生がいて生徒がいてという感じでしたね。教室のスタイルをとるということは，生徒が村に帰ってきっと同じように教えるのではないかと思います。

谷山　様々な問題が出てくると思いますが，それでは何もやらなければ良いのか，ということにはならないと思いますね。要は村の人たちが少しずつ生活を改善していけたんだという自信だと思うんですね。自分たちの手で。そして人材育成から入って，指導員そのものに村の伝統的なものを調和させていかなければならないと思います。また，4カ月のヴィエンチャンでの研修生活だけで終わるのではなく，村で受け入れられない壁にぶっかった時に，例えばタイの農村で村ぐるみで生活改善に取り組んでいる所ではどういうノウハウがあるか，実際に行って見たりしながら，本当はこういうものがいいんだということをつかんでくれればいい。今はそのきっかけとして始まったばかりだと思うんですけど。

本田　指導員自身は自ら治療行為をするわけじゃないですよね。少し参考になると思うのは，86年の統計なんですけど，看護婦・助産婦のトレーニングを受けた人が，7000～8000人もラオスにいるそうなんですね。要するに人は養成しているのだと。ところがその人たちはどこへ行ったのかわからないんですよ。その人たち自身が何か学んだかもしれないけど，田舎に送られても何の権限も与えられない，何をしていいのかわからないなかで，日がたつうちにやる気もなくしていって，結局ほとんど役割を果さないまま眠っちゃっている場合が非常に多いんですよ。下手をするとJVCの指導員もその二の舞いになるという危険性が大きいと思うんですね。今まで育てたヘルスワーカーがどうしてうまく働いていないかという失敗から学ぶことも大切じゃないかと思うんですよね。

谷山　いかに村人の協力を得るかということですよね。

村人を いかに巻き込むか

本田　これはカンボジアのラインセンターでも反省しているんですけど，ラインセンターの中心にいるスタッフというのは白衣を着ていてきれいな格好をしているんです。そういう人たちは田舎のおばさん，おかあさんから見ればちょっと「高い人」と思われちゃうんじゃないかというところもあるんですね。指導員も郡レベルに帰って行って，そこにオフィスを構えて働くと，相当村の人たちから敬遠されちゃうというか距離ができちゃって，本当に親しんでもらえたり指導してもらいたいと，村の人たちの方から出かけて行って相談するという意味の親近感は生まれてこないんじゃないかなと感じたんですね。それとは逆の面かもしれないですけど，指導員の服務

内容は何なのかということです。村の人から見たとき，指導員は首都の方で教育されてきたけど，その人たちが何をやる人なのかということが端的に分かってもらえるかどうかですよね。

星野　その村から出てきた人がその村に帰るとは限っていないでしょ。

谷山　基本的にはそうです。ひとつの例外はカムムアン県です。ここの指導員は県都であるタケック市出身の人が多い。だからここでは市内にヴィエンチャンのセンターの小型版を作って県レベルでより地域に適したトレーニングを継続できるようにしました。それ以外には村からきている人が圧倒的に多くて普及センターを作る場合にも村レベルで集まって，いろんな事を話し合えるような場として考えているわけですね。

束村さんは村から出てきた指導員が帰る時，一諸に行って活動している姿をかいま見たわけですけど，本田さんが言った意味での遊離というか，住民と離れる恐れがあるのではないかということはどう感じました。

束村　地域から浮いてしまうということは，あまりないんじゃないかと思いました。村長さんも指導員の人たちと一諸にアンケートにまわったりしていましたから。小さい村ということもあり感覚的なんですけど，うまく地域に入っていけたように思います。

星野　4カ月の研修期間中に村の村長さんとか，その次の人を呼んだ方がいいのではないかと思うの。「こういう目的でやっていますよ。自由に見学して下さい」とか。「どこどこの○○ちゃんが呼ばれて帰ってきたよ」では入りにくいと思う。これでは腕があっても発揮しにくいと思う。

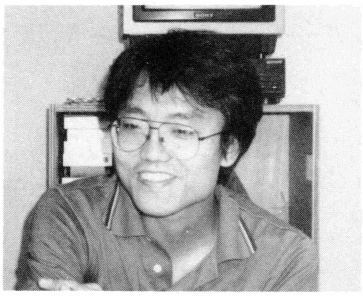
谷山　JVCは必ず村を巻き込む形を取っているんですけど，ラオスの場合，村のレベルでプロジェクトを始めるということがむずかしい。社会主義なのでプロジェクトを始める場合，中央政府とジョイントしてやらなければならないんですよ。上意下達的構造の中に入って，いかにして底辺の方の意欲をもりたてていくか，決定レベルまで巻き込んでいくかは容易ならぬことなんですよね。ヴィエンチャンに勉強に来るのは各局の偉い人が普通です。だから，指導員が来たということは，普通の人からかなり近いレベルから来て勉強したということで，やっと底辺の方につないでいける第一歩かなと思っているんです。村人と村人，指導員が働いている村と村を結びつけることによって大きな刺激があると思う。今までと違う感じで農村開発をしている所，たとえばタイの村ぐるみでアグロ・フォレストリーを実践している村の農民と交流するとか，要はいかに結びつけるかが大切だと思うんです。かなり時間がかかると思いますけど……。

ラオスプロジェクトの今後に向けて

谷山　これから，JVCがラオスにかかわっていくなかで希望とか夢があったらお願いします。

星野　もしかしたらラオスで死ぬかもしれないと思っています。長くかかわる可能性もあると思う。プロジェクトも仮に5年なりしてうまく動き出した時に地域的にも広がりが出るだろうと思います。

束村　私がプロジェクトをやるとしたら，山岳地域でやるのが一番



束村　康文さん

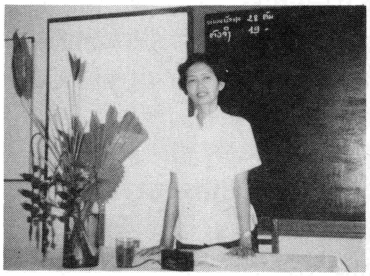
効果があると思うんですよ。自分が四国の山の中で育ったので，そんな所で生活指導員の人から受けたノウハウをいかせたら，足が地についた形でお手伝いできると思う。

本田　印象的なのはOHI(注)の活動でした。ヴィエンチャンにアトリエ兼リハビリ道場といったものがあり，身障者の人たちに200 m障害物競争みたいなかなり厳しいことをやらせる。目的は装具を忘れさせるためで，忘れなければリハビリテーションそのものも装具も成功したとは言えない。彼らは中央に先生を育てるための学校作りをし，はじめはフランス人がやっているのですが，だんだんに先生もラオス人にして，いずれは撤退するようにしている。そして県にはなるべくセンターを作るようにしている。また，ライやハンディキャップの人のため村を作るなど多面的にやっている。JVCも村にしっかり足を踏み入れ，長続きすることをやれば良いと思っています。

谷山　どうもありがとうございました。

（注）**OHI：Operation Handicap International**　フランスのNGO。戦傷によって手足を失った人への義肢の提供，及びリハビリテーションなどを行っている。

わたしたちの力で よりよい村の生活を築いていきましょう



ラオス婦人連合副代表
Dr. ターボン・ヴォングサック

1989年の6月22日，2年間にわたるラオス政府との交渉と準備の末やっとトレーニングが開始された。開講式では，JVCのラオス代表の谷山に続いて，このプロジェクトの婦人連合側の責任者であるDr.ダーボン・ヴォングサックによる挨拶があった。

JVCの代表の方々，トレーニングセンター職員の方々，ラオス婦人連合本部の職員の方々，各省庁からの講師の方々，本日の開講式のために上京されたカンムアン県婦人連合及びボーリーカムサイ県代表の方々，そして，地方から集まった研修生の皆さん，本日はようこそ，この開講式に出席してくださいました。

この母子保健トレーニングは，地方の婦人の生活や知識の向上，ひいてはより良い社会を作るという目的を持って行われる，婦人連合としては最初のもので，大変喜ばしいことです。こういう第一回目の催しにしては，この開講式はささやかなものですが，この輝かしいトレーニング修了の4カ月後には，センターのスタッフの経験を結集し，ここで多くのことを学んだ研修生を各々の地方に送り出すために，盛大に修了式を行おうと思っております。

このトレーニングの特徴は，講義と同等に実習を重要視しているということです。過去のどのようなトレーニングにおいても，講義のみの内容で，トレーニングが修了すれば，学んだことはことごとく忘れてしまい，その後何をしたら良いかわからないというのが一般的でした。こういう観点から，このトレーニングは，4カ月のトレーニングに対して長い実習期間を盛込んであります。そして，研修生は，このセンターで学んだ母子保健，幼児教育，家庭経営，農業などの知識や技術を各々の村に帰って，村の人々に広く伝えてほしいと思っています。トレーニングは4カ月で終わりますが，これで終わりではなく，一定期間各々の村で活動した後，またこのセンターに戻り，新たな知識を吸収する機会もあります。このプロジェクトは，国連開発プログラム（UNDP），国連女性開発基金（UNIFEM）の支援を得て3年間続きます。したがって，この期間中にセンターの職員が研修生の活動する各地域に出向きその活動振りを評価するという計画もあります。

研修生の中には，幼児教育の中等課程を修了していたり，保健婦，あるいは教師として活躍している人もあります。こういう専門過程で学んだ人たちの中には，4カ月で何が学べるのだろうかと思っている人もいるかもしれません。このトレーニングでは，通常の学校教育では学べない科目，つまり，母子保健，家庭経営，農業，そして新しい適正技術が盛込まれており，これらはすべて実生活で役立つものなのです。

講義にはそれぞれ専門の講師を招き，短いトレーニング期間でも，研修生がある一定水準の知識や技術を得られるよう配慮してあります。この講義が2カ月間，そして，実習が2カ月間という計画です。この実習では，研修生が学んだ知識を県から郡へ，郡から村へと伝えていきます。例えば，村の保育園に勤務する者は，そこで幼児教育の重要性を説明し，学んだ技術を現場で活かすことができます。またそれ以外にも，母子保健や家庭経営などの知識や技術を村の人々に説明し，広めていくことができます。こうして，村の現場から地方の開発を行おうとしているのです。

このような活動は，保健省や農業省，そして文部省の各県，郡の支部と協力して進めてゆくことになります。地方の開発は，私たち婦人の発展にもつながるのです。

先ほどもJVC代表が言われたように，私たちの国では乳児死亡率が100人中17人と高い数値を示しています。以前は100人中24人という高率でした。この10年ほどで多少，少なくなってきてはいるもの

の，この数値は諸外国と比較すると非常に高いと言わざるを得ません。

このことから，私たち女性は特に母子保健の知識を得，健康な生活をおくるよう努力しなくてはなりません。女性同士が協力して，来たる21世紀に向けて皆のよりよい生活を目指そうではありませんか。

私たち婦人連合の団結は強く，現に，ここにも地方2県の代表が列席して下さっています。ヴィエンチャン県支部代表は列席しておりませんが，ヴィエンチャン市とヴィエンチャン県は距離的に近いので，お互い協力して活動をすることは容易です。

研修生のみなさん，トレーニング期間は4カ月と短いものですが，多くのことを学んでください。時期的に雨が多く過ごしにくい時ですが，健康には十分注意して，沢山の収穫を得るよう努力し，無事修了されることを願っています。

このセンターはできたばかりで，皆さんが第一回目の研修生です。備品など十分そろっていないものもありますが，センターの職員と共に快適にトレーニングができるよう努力していきたいと思っています。

このセンターを寄贈して下さったJVC，トレーニングに関して支援して下さるUNDP，UNIFEMそれぞれに感謝するとともに，これから起こる様々な問題を皆の力で解決し，この第一回目のトレーニングが良い成果をおさめるよう祈ってやみません。

本日は，本当にありがとうございました。

あなたもラオスの女性達を応援しませんか

ラオス情報紙『みたぱーぷ』編集グループから

ラオスは，文献や情報量の乏しさから，隣国のタイに比べ，私達日本人にとってとても遠い国のように感じられます。その遠い国，ラオスが少しでも私達に近くなるように，との願いから“ラオスだより―みたぱーぷ”は生まれました。JVCのラオスでのプロジェクトの現状報告を中心に，ラオスの風俗や文化，日本国内でのラオスに関する催しの紹介などを取り上げていきます。これにかかわるメンバーは，政治・経済，農業，保育，織物などなど様々なバックグラウンドを持った人達が集まっています。それぞれの視点から，ラオスに取り組み，豊かな紙面を作っていくために頑張ります。みたぱーぷ（友好）が，その名の通り，私達日本人と，ラオス人との友好の架橋になることを願いつつ…。（森佳 麗（うらら））

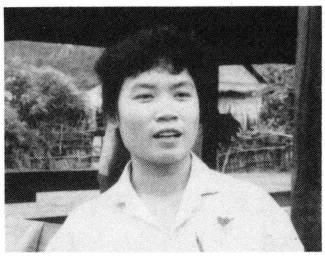
JVCではラオスの活動を支えるボランティアを常時募集しています。（例えば，ニュースレター「みたぱーぷ」の編集，発行，講演会やイベントの企画，国内定住ラオス難民との交流，ラオスへのスタディーツアーの企画などなど……）

◀ 編集長の麗さん

『みたぱーぷ』編集会議

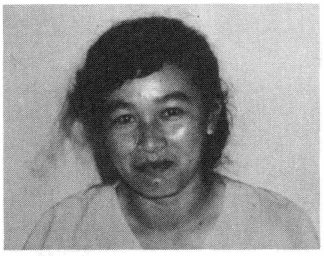
ラオス母子保健プロジェクト参加者の横顔

現在のトレーニング参加者は27人で，出身地はヴィエンチャン県，ボーリーカムサイ県，カンムアン県，ヴィエンチャン市で所属も政府各省庁とまちまち，年齢も17～40歳とバラツキがあるにもかかわらず，みな実に和気あいあいとしている。何のこだわりもなく誰とでも仲良くなれるのはラオス人の特性だろうか。授業の休み時間に大きな声でおしゃべりをしたり，講師が授業に遅れてくれば机を叩きなら歌をうたって待っていたり，とにかくほがらかである。しかし授業中に内職をしたり，水を飲みに立ったり，年齢の割には子どもっぽい面もしばしば見かける。これでワーカーが勤まるのかと時々我々を不安にさせるのだが，フィールドに出る時には皆さすがにひきしまった顔になる。27人の中でどれだけのワーカーが育つのか，どんなワーカーになるのか，これからが楽しみだ。今回はその内の４人を紹介したい。



ランパン　21歳　まだ年若いのにしっかり者の彼女は家庭でも５人兄弟の長。ラオス婦人連合ボーリーカムサイ県ボリカン郡支部の副支部長である。地域の人達からも今後を期待されている人物だ。彼女の少し高めの声は人を説得する力がある。トレーニング終了後は研修中に学習したことを「責任を持って地方で実践していきたい」という。地方に帰っていく時に今まで見せなかったキリッとした顔つきになり，彼女の頼もしさを感じた。

カンプー　31歳　一見おしゃべりな奥さん風に見える彼女は，実は女手ひとつで三児を養う強い母親だ。ボーリーカムサイ県教育部所属幼稚園の保母。労働条件の悪い保母を10年も続けてきた彼女は「同僚は現金収入欲しさに次々に転職していった。でも私は必要だと思うから保母を続けてきたのだ」と，しんの強さをうかがわせる。「ラオスの事に関心を持ってくれてJVCの人には感謝している。今後も学んだことをいかして村人の生活向上に努めたい」という。



ソンミサイ　21歳　キョロッとした目がチャーミングな彼女はラオス婦人連合カンムアン県タケック郡支部の事務員。家は９人の大家族である。おとなしくて普段はあまり目立たない彼女も，実はかなりのおしゃべりらしい。休み時間やフィールドトリップに出た時には実に生き生きとしている。「トレーニングに参加することができてとてもうれしい。地方へもどったら自発的に活動していきたい」といっている。

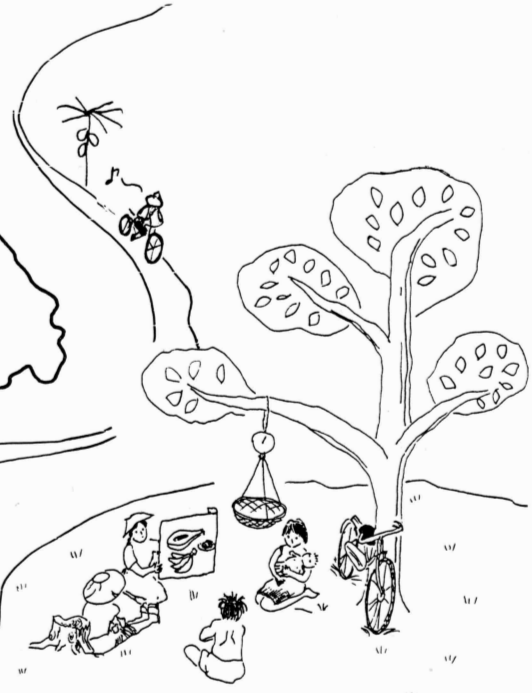
インカム　19歳　トレーニング参加者の中で年少の部類に入る彼女は，家庭では７人兄弟の一番上。ヴィエンチャン県ゲオウドム郡コッキエン村の保母。物静かでひかえめだが講義に対する姿勢は積極的である。「特に母子保健に関する知識を村人に広めていきたい」という。今後，コッキエン村に建つ母子センターで中心になって活動してくれることを皆に期待されている。

研修生カンプーさんの活動

①ヴィエンチャンのセンターでトレーニングを受けたカンプーさんは自分の村へ帰り，村人の生活改善の手助けをします。

ミタパープ友好母子トレーニングスクール

②村のコミュニティセンターでカンプーさんは母子保健などの指導をします。



③子供の健康を守るためには栄養教育が大切です。カンプーさんは自転車で村々を巡回して子供の成長をチェックします。

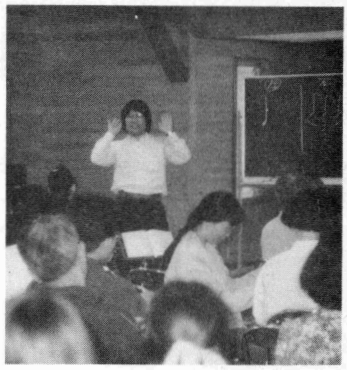
④農業は村の生活の基本です。カンプーさんは栄養改善のために栄養のある作物をつくるようにすすめます。

⑤カンプーさんはヴィエンチャンのセンターで再びトレーニングを受け，自分たちの村でぶつかった問題や経験したことを話し合います。

いんたびゅう

JVCコンサート『メサイア』の合唱を指導する 郡司 博さん

音楽で社会の役に立てれば…



ご案内のように，この12月8日（この日に特別の因縁を感じるのは，歳なんでしょうね），JVCの単独イベントとしては空前のスケールで，チャリティ音楽会が開かれます。マキシム・ショスタコヴィッチ指揮のヘンデルのオラトリオ『メサイア』の公演がそれです。この催しは多くの方の善意でなりたっています。まず，無料で出演をOKしたマキシム・ショスタコヴィッチさんと4人のソリストたち。彼らの航空券を提供してくれるノースウエスト航空。ショスタコビッチ夫妻に宿泊を提供する帝国ホテル。また昭和女子大学は人見記念講堂を無料で貸してくれました。

日本側で出演する，新日本フィルハーモニー交響楽団と東京オラトリオ研究会，東京ライエンコーア，東京アカデミーの各合唱団。チラシの制作協力のコンセプトインターナショナル，凸版印刷，王子製紙。そして，もう入場券を買ってくださった多くの方々（各国の在日大使の方も少なくないとか）。そして忘れてならないのが，書かないのが通例ですが，このコンサートを実現し，運営するアイネス・バスカビルさんをはじめとするJVCのボランティアたち……。実に多くの人の協力によって，コンサートは開催され，そして1千万円を超す収益が予定されています。

そんななかで，もっとも大事な役目のひとつを担っているのが，7月から毎週合唱をトレーニングする郡可博さんと金井敬さんです。特に郡司さんは無料で合唱を指導するだけでなく，日本側の音楽団体のコーディネーターのような役割も，はたしています。その郡司さんにインタビューしました。（A・G）

毎週1日はノーギャラの日

―― このコンサートのために，合唱に参加するアマチュアの方を募集されたそうですね。

郡司 最初は応募者は200人くらいかと思っていたのですが550人もの人が集まって……。みんな意識もレベルも高い人たちです。演奏会にはこれに東京アカデミー合唱団の150人が加わります。

―― すごい数ですね。

郡司 これは，大量に募集のビラを配布したことも原因のひとつです。コンサート会場や家庭のポストなどに15万枚をまききりましたから。合唱に参加するとか，演奏会にくるとかいうこととは別に，こういう催しをやっていると，知ってもらうのもいいことだから，と考えたからです。

合唱団があまり多くなったので，新年，もう一回公演をすることにしました。どちらに出るかは本人の希望通り，両方出る人もいます。こちらもチャリティでやりますから，ぜひ聞きにきてください（右ページ下の囲み参照）。

―― ところで郡司さんは，7月から毎週日曜日に，合唱のトレーニングをしていらっしゃいますね。公演までには，約20回にも……。

郡司 核兵器とか南北問題とかに関心がありましてね。どちらかというと黙っていられないタイプなんです。

実は，毎週一日はノーギャラの日にしているんですよ。5年ぐらい前からですが，音楽をすることが生きがいですから，休みがあっても仕方がないし，何か社会に役立つことをしようと……。まあ，収入の15%を還元するということです。日本ではなかなか演奏できない曲をやるとか，無料で合唱を指導するとか。で，今年はこの演奏会というわけです。

社会に関心のない人から芸術は生まれない

―― なぜ，JVCのコンサートに？

郡司 好きなことをしたいし，思いつきですね。まあ，郡司博がこんなことをやっているということが合唱関係や社会の人に対して，多少はインパクトを与えることになれば……。

―― 音楽だけをやっていればいいという，芸術至

上主義の人もいるのでは？

郡司　今の世の中のことや，歴史的なことに興味を示さず，音楽だけがひとり歩きするというのが芸術至上主義でしょうか？　ぼくに言わせれば，ただの無知です。芸術というのは，人格というか生き方，生きざまが出てくるものなんです。社会に関心を持たない人は，だめですね。

――　聞きかじりで，申しわけないのですが，何年か前に『アマデウス』という映画がありましたね。あのなかで，モーツアルトは人格破綻者として描かれていましたが……。

郡司　人格というのは固定的なものではなく，時代背景から考える必要があると思いますね。モーツアルトは自分で意識していたかどうかは別にして，汚いもの，美しくないものに対して憎悪していたと思いますね。そうでなければ，あの美しいメロディが出るはずがありません。

――　反対に，人格は素晴らしくても，技術が伴わないということもあると思いますが，今回の合唱団はいかがですか？

郡司　さきほども言いましたが，素晴らしいものですよ。それに，あれだけの人が集まって，合唱を通して，社会になにかをしようというのは，日本も捨てたものじゃありませんね。ぼくにとっても，毎週２時間半の指導時間はパラダイスのようなものです。

このオラトリオは合唱音楽の出発点

――　申し訳ないのですが，音楽関係にはまことに不案内でして……。少し基本的なことを教えていただけますでしょうか？　まず，ショスタコヴィッチさんというのはどういう方なのですか？

郡司　そうですね。お父さんのデミトリー・ショスタコヴィッチは現代最高のソビエトの作曲家でした。彼もニューオリンズ交響楽団で常任指揮者を勤めていますから，楽しみな指揮者です。

――　４人のソリストの方は？

郡司　それぞれ一流の方々です。

――　で，今回のコンサートの料金は，少し高い気もしますが。

郡司　正直言うと少し高いですね。

――　なるほど，出演するほうも観賞するほうもチャリティというわけなんですね。『メサイア』というのはオラトリオということですが，オラトリオというのは？

郡司　宗教的なものに題材をとった音楽物語ですがオペラのように演劇的なものではなく，音楽だけで進行します。

――　そのなかで，『メサイア』というのは？

郡司　あらゆる宗教音楽のなかで，ヘンデルのあらゆる作品で，合唱がもっとも中心をなしている作品です。技法的には４パートからなるフーガ（高級な輪唱？）が大部分を占めています。

時代的にはバッハとほぼ同時代，産業革命期のイギリスで書かれた作品です。演劇がさかんで，明るい時代ですから，純粋のドイツ音楽と比べると（ヘンデルはドイツ出身）イタリアの通俗的なメロディが入っていたりして，明るく，多少軽いものになっています。宗教的にはいくぶん深みがないという評価もできると思いますが……。

近代の合唱音楽，宗教音楽の出発点ともいえる音楽で，合唱を志す人なら，一度は歌っておくべき作品で，やったことのある人とない人では差があるといえます。

――　聞くほうでも必須ということが？

郡司　まあ，そうも言えますかね。

――　合唱指導と，２度の公演，ぜひ，頑張ってください。

郡司　ありがとうございます。

●ショスタコヴィッチ氏の『メサイア』

マキシム・ショスタコヴィッチ

日時：12月８日　午後７時より
場所：昭和女子大学人見記念講堂
出演：本文の通り
料金：１万円，5000円
問合せ先：JVC　03（835）0516

●本番の切符が手に入らなかった人はこちらに
日時：1990年１月７日 午後12時より
場所：東京上野の東京文化会館
出演：新星日本交響楽団，
　　指揮ジョン・オリバーほか
料金：5000円，4000円，3000円
問合せ先：郡司音楽事務所　0425（22）3929

先進国援助とアジア

タイ周辺国の森が狙われている！

岩崎 美佐子

1988年11月末，タイ南部で森林伐採に起因した大洪水と土砂崩れが起こり，たくさんの村が土砂に呑み込まれ，死者四百数十名を出したあと，タイ政府は国内全土における森林伐採を全面的に禁止した。伐採業者からの突き上げもあるなかで，全面禁止が成立し得たのは，これまで国交を断絶していたインドシナ三国，およびミャンマーとの国交回復のきざしが見え，これらの国々からの材木の買いつけが可能であったからにほかならない。事実，12月にはタイの私企業2社がミャンマー政府から，反政府勢力居留地における伐採権を獲得しており(89/12/1 バンコク・ポスト紙，以下BP)，1月には在タイ，ラオス大使館にタイの私企業が招待され，ラオスの森林伐採のための共同企業設立について協議している(89/1/4 BP)。また，タイはベトナムとも森林伐採の共同企業設立について協議しており(89/1/18 BP)，はや2月にはミャンマー国内の国境周辺で，伐採が活発化しており，4～5万人がこれにたずさわっていると報道されている(89/2/8 BP)。また3月には，カンボジアから，最初の材木輸送船がタイに入港している(89/3/26 BP)。

経済成長を続けるタイ

1980年代後半，海外に投資先を求める企業の目はタイに集中した。その要因としては，従来からの投資先対象であったアジア新興工業国・地域（NIES）諸国では，特別関税待遇の切れる日が間近に迫ってきており，人件費も高騰していること，さらに対米ドルに対する現地通価の切り上げ圧力などから投資誘因が失われつつあること，フィリピンでは政情が不安定であること，マレーシア，インドネシアではマレー人優遇政策があることなど，タイを取り巻く状況と，タイ国内の経済的，政治的，社会的な安定とが考えられる。

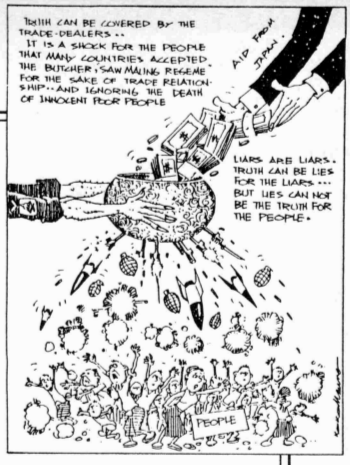
さらに，タイは後背地としてインドシナ三国とミャンマーを持っているという大きな強みがある。かつて高い文化と一大勢力を誇ったこれらの国々は，西洋の列強によって植民地とされ，第二次大戦後，やっとその支配から独立を勝ち取ったものの，冷え切っていた東西両大国の思惑に翻弄され続け，内戦などにより経済が疲弊した。これらの国々は経済の復興をはかりたいと切望しており，政情も安定してきたことからタイはこれを歓迎し，1988年にはこれらの国々と一気に国交を深めている。タイにしてみれば市場は増え，自国で枯渇した森林資源は手に入るのだから，一挙両得という感じであろう。タイ経済成長率は，85年3.5％，86年4.7％，87年7.1％，88年は8％以上を記録した。

失われる森と人々のくらし

輸送網と情報網が飛躍的に増大した現在，工業化した国々は資源を求めてどこまでも出かけて行く。資源しか持っていない国はいつかなくなる資源を売ることでしか対抗できない。援助の名のもとに資源を運び出し，加工しやすいよう，道路，橋，港，電気，水，通信，工場などが整備される。今，ラオス国内に50カ所もダムを作る計画がなされている。ラオスにダムを作ってタイへ水を安定供給することは，ラオスの意向以上にタイの意向，そしてタイに投資している日本，その他の国々の意向であろう。しかし，その水も，その地域に住む人たちには届かない。頭を越えて持って行かれてしまうわけだ。流れを止めた水にミヤイリ貝が住み，住血吸虫に苦しめられる恐れがあるというのに。

伝統社会から国際社会への移行は，全体を生きることから，部分を生きることへの移行にほかならない。衣食住のすべてを自分で受け持てる社会から，ひとつの価値観を持った国際社会システム全体の，ほんの一部を受け持つ生活を始めたら，もう全体を生きる生活には戻れない。

あくなき消費への欲望をかきたてるこのシステムの中での生活は，地球環境破壊，おびただしい数の種の絶滅というかたちで，答えを出そうとしている。もっと違った生き方はできないのか。タイでの活動から始まったJVCの運動は，「もうひとつの生き方」の希望の芽を求めて，タイからカンボジアに向かい，ラオスに向かい，そしてミャンマーについても，どうかかわっていくのか，今，模索中である。



ミャンマーは今！

緊張つづく国内情勢

JVC東京事務所に週に1回くらいの割で顔を見せ，英字新聞の切り抜きファイルの整理などを手伝っていたアリソン・テイトさんはオーストラリア人で，1988年の9月から半年バンコクに滞在し，そのあと日本に半年暮したのち，再びバンコクに帰って行った。テイト嬢は，バンコクでは，元JVCスタッフのテレース・コエットと同じNGOで働き，軍事政権によって中央ビルマを追われ，タイ・ミャンマー国境やタイ国内で斐惨な生活を余儀なくされている学生たちを人道主義的に援助している。彼女は，現在ミャンマーと商取引をしている国々の政策が，軍事政権の延命に大きく影響していると指摘している。とりわけ取引高の大きい日本の政策が，ミャンマーの人たちの未来を握っているので，日本の人々に，もっと日本政府がミャンマーでしていることに注目し，監視して欲しいと訴えている。ミャンマーでは政治的な変革なくして，社会的，経済的な変革の自由はあり得ないからだ。

昨年の8月，9月，ビルマの都市や町で繰り広げられたゼネストやデモの様子が，世界中の新聞のトップを飾った。当時，ビルマの人々は，26年間彼らを抑圧してきた軍事政権をくつがえす機が熟したと感じていた。人々は民主化を叫びながら通りに出た。政府はこれに発砲で応え，暴動は激化した。

そして，1年。ビルマではなにも変わっていない。国名がミャンマーとなり，およそ1年ぶりに小学校が再開された。しかし，戒厳令は依然敷かれたまま，5人以上で集会することは禁止されている。来年に予定されている「自由で公正な」選挙準備をしようとしている対向勢力に対しては，厳しい拘束を強いている。

ミャンマーは恐怖政治の国である。ミャンマーにおいては，平和と人権の回復をもたらす政治的・経済的な変革はたいへん難しい。しかし，人々は変革のために戦う意思と決断を見せてきた。

ミャンマーの人々はこの苦闘を支持してくれるよう，世界に訴えている。公式発表では国家予算の約50％が軍事費に費やされているが，他の調査ではこの比率はもっと高い。現政権誕生時は人権侵害に反対の立場をとっていたタイ，日本，韓国，オーストラリアなどの国々は，軍事政府によって提示された森林伐採や漁業権からの利益への欲望に目がくらみ，現政権と契約を更新している。外貨は特権階級の人々の生活を維持するため軍需品の購入にあてられ，ソウ・マウン政権は獰猛で高価なそれら軍需品を自らの国民と戦いに使ってきた。森に潜んでいる反対勢力を根絶し，彼らの補給路を断とうとして，強制労働，拷問，農村の徹底的破壊が行われている。

私たちにどのようなことができるか。

* 自国（日本）政府がソウ・マウン政府を支持するのに反対する。
* 非暴力的な政治運動や信仰を理由に逮捕された人たちの訴えを伝えていく。
* 拘留者の人権を認め，彼らを即刻，無条件に釈放するよう，要請する。
* 強制逮捕の脅威にさらされている学生，および合法的に登録された政党のメンバーの安全を保証するよう呼びかける。

どうぞ，以下の人たちに抗議の葉書を送ってください。

General Saw Maung
Chairman State Law and Order
Restoration Council
Ministry of Defence
Yangon, Myanmar (Burma)

Dr. Pe Thein
Minister of Health and Education
Minister's Office
Yangon, Myanmar (Burma)

U Ne Win
Patron of the War Veteran's Organization
University Avenue
Yangon, Myanmar (Burma)

〒100 東京都千代田区永田町 2－3－1
通産大臣
田村　元

（アリソン・テイト）

新たな難民問題——二つの開国

鴇田三芳

友人からの電話

久しぶりに友人から電話が入った。かつてJVCで活躍していた仲間である。今は，在日ベトナム人と結婚し，子供にも恵まれ，つつましやかな生活をいとなんでいる。いつもは明るい人だが，今回は受話器から重い言葉が伝わってくる。ここ最近，ベトナムや中国から日本に漂着する人々が急増したためか，近所の人から嫌がらせがあったという。「ベトナム人と結婚している」という，ただそれだけの理由で。

異常な反応

「経済難民」，「偽装難民」，「難民襲来」，果ては「難民がエイズを持ち込む」とか，マスコミが騒ぎたてている。その多くは，問題の核心には触れず，ただ儲けるために歪曲，誇大報道に専念している。そこには，実に危険な世論誘導が見え隠れしている。

外務省の担当官によると，この関係で電話や手紙が殺到しているという。そのほとんどは，「難民なんか受け入れるな」とか，「すでに受け入れた難民も故国に帰せ」とかに代表されるように，実に排他的なものだという。たかだかこの程度のことで右往左往している一部の国民をみると，私は例のパニックを思い出す。多くの日本人が，石油ショックの時に業界やマスコミに躍らされ，トイレット・ペーパーを買うために長蛇の列をつくった，あのパニックを。

今年８月現在，日本に滞在もしくは定住している難民数は，１万人以下。他の先進諸国と比べて，実に少ない。アメリカに約100万人，カナダに約35万人。フランスには約18万人。西ドイツに約15万人。スウェーデンに約13万人。イギリスに約10万人。日本とは桁違いに多い。香港にいたっては，人口600万ほどの小国に，なんと６万人以上もの難民がいる。「日本の国土は狭く人口密度が高いので，もう難民は受け入れられない」などという理由は，香港の例を知ると，まったく不毛と思える。かつてインドシナ難民が大量に発生し，その救援が叫ばれた時，「日本は，金は出すが，なぜ人は出さないのだ」と国際的な非難を浴びた。今や「金は出すが，人は出さず，人を受け入れもしない日本」というレッテルを貼られるに違いない。

身勝手な人々，日本人

９月20日に開かれたある会合で，外務省人権難民課の方がこぼした。「最近，全国から電話がかかってきます。それを聞くにつけ，日本人は何と心の狭い，身勝手な国民だなと痛感させられます」と。

日本を経済大国に押し上げた企業戦士は，今や世界を股にかけ活動している。その数は17万人を超える。家族まで含めれば，60万人ほどにもなる。ところが，日本で合法的に働く外国人は約４万人。あまりにもアンバランスである。さらに今や，人だけでなく，莫大な日本資本が世界に進出している。

また歴史をさかのぼれば，日本は明治維新以来，一方的に国民を移民させてきた。北米，南米，東南アジア，……。朝鮮と満州には武力を盾に大量に入殖させた。現在でも，外務省内には領事移住政策課があり，外務省の外郭団体・国際協力事業団の移住事業部を核に，日本人の海外移住を進めている。日本政府が把握しているだけでも，移住目的で日本を発った日本人は，昭和62年までに約100万人にものぼる。

このように見ると，「日本は，人と資金を世界にばらまき，その結果として，自国に物質的な豊かさを実現した」と言っても過言ではないだろう。そして今や，その豊かさを求めて外国人が日本を，東京を目指してくる時代になったのだ。今回の一連のボート漂着も，その一形態でしかない。海外に国民を送り出してきた日本が，今度は逆の立場になりつつある。

労働市場の開放しかない

上述のように，今回の問題を単なる難民問題として捉えると，本質を見失う。この問題は，観光や就学という名目で来日し実際は就労しているアジア人，いわゆる「不法就労者」の問題と同じである。日本の経済力が周辺国と比べ桁違いに大きいにもかかわらず，国境という障壁で労働者の流入を阻止していることが，根本的な原因である。

こう考えると，その解決策はおのずと見えてくる。

それは，一定の制限と条件をつけて，外国人の就労を認めることだ。つまり，労働市場の開放である。もちろん，受け入れ人数とか，滞在期間とか，権利とか，日本人労働者への影響とか，諸懸案はあろう。しかし遅かれ早かれ，日本の労働市場を諸外国に限定開放するしかない。自分たちだけがイイ思いする時代にはもう訣別する時がきた。

ちなみに，アメリカ合衆国では家族も含め1000万人以上の，西ドイツやフランスでは同様に500万人近くの外国人労働者が働いている。だが日本には，在日朝鮮人・韓国人（約68万人）を除けば，家族を含めても26万人ほどの外国人が日本で働いているだけだ。

いずれにしても日本人は今，二つの開国を迫られている。法律上の開国と，一人ひとりの心の開国を。この二つの開国なくして，国際社会の中で日本人が生きのびる道はないだろう。

それでも残るふたつの問題

日本の労働市場を開放した場合でも，ふたつの問題は残る。

ひとつは，就労人口の第三次産業への移行，いわゆる産業の空洞化である。つまり，身体を使って実際に物を作る日本人が減少し，工業製品から生活必需品にいたる物まで海外からの輸入に依存する傾向が年々進行している。もし労働市場を開放すれば，この空洞化に拍車をかける可能性がある。なぜなら，アジアからの労働者の多くは日本人がやりたがらない3K労働（汚い，厳しい，危険な仕事）に就くことが予想されるからだ。

もうひとつの問題は，例えば，アジアの田舎の人が，ひと儲けして故郷に帰った後，金銭的には豊かになっても，本当の幸せを得られるのだろうか，という点だ。多分その人は，地域の人々から羨望の眼差しで見られるだろうが，その地域の伝統的な生活から遊離し先進国に依存した生活をいとなみ続けることになるだろう。そんな生活から得られる幸福感は，物質的な充足感だけではないのだろうか。

JVCの対応は

私たちは，何度かの内部議論だけでなく，関係団体との意見交換も重ねてきた。その結果，現時点では次のような認識にたどりついた。

①政治難民も経済難民（注を参照）も根本的には同じである。また，最近ベトナムや中国から日本に漂着している人々の発生原因は，アジア諸国などから来ている不法就労者の発生原因とも共通で，日本とアジア諸国の経済格差である。

②日本は，労働市場を海外に対して一定の条件つきで，開放すべきである。

③日本に住む外国人に対しての取り組みは，基本的には，地域住民と地方自治体にまかせ，特定の団体が関われば済むという問題ではない。

このような認識にたち，JVCは以下のように対応しようと一応確認した。

①JVCの活動の中心は海外の現場にあり，難民などが出ないような第三世界の国づくりの支援に，今後とも力をいれていく。

②神奈川事務所が主体となって，アジア人労働者，中国残留日本人孤児，在日朝鮮人・韓国人などに対して支援活動を行っている人々・団体と連帯する。例えば，このような団体とともに勉強会などを重ね，シンポジウムの共同主催などを考えている。

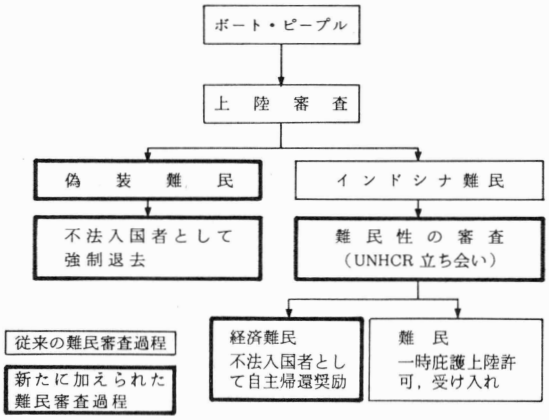
③ただし，今度のように漂着してくる人々に対して直接的な活動は行わない。

この件で私が一番気にかかるのは，日本政府の対応以上に，ヒステリックともいえる日本人の反応である。

話は少々飛躍するが，もし何らかの原因で日本の経済力が急速に低下し，十分な食糧が輸入できなくなったら，いったい日本人はどうするのであろうか。トイレット・ペーパーの不足ごときで右往左往した日本人の，3000人ほどのアジア人が漂着したくらいでヒステリックになる日本人の，未来がこわい。

（注）

最近のボートピープルの急増により本年9月12日の閣議了解で以下のように難民審査のしくみが変化した。



JVCNEWS

エチオピア人スタッフ来日

約束の9月30日，JVC東京事務所へ行くと2人のエチオピア人スタッフが待っていてくれた。9月5日の来日以来，日本全国を飛びまわるようなスケジュールで，この日も午後から横浜市の「アフリカの集い」に出席するため，昼食を食べながら1時間足らずのインタビューということになった。

まず私は，ダニエル・アビチュウさんの隣に座った。彼はお弁当を食べていたのだが，ハシを使うのがとても上手なのにはびっくりした。今回の訪日の目的は，と尋ねると「エチオピアの現状とそこでJVCがどんな活動をしているかを，できるだけ大勢の日本人にアピールしたい」という。先日法政大学で行われた『環境問題国際市民会議』にも参加し，「エチオピアの環境回復」と題して，スライドを映しながらスピーチをした。ダニエルさんは，エチオピアではマーシャ村と首都アジスアベバ間の物資輸送も担当している。

エシャトウ・カプティーマさんは，元コックさんだが，次第に人々の栄養や健康について考えるようになり，今ではマーシャ村のお母さん達に保健・衛生などを教えている。また，野菜の種類が限られているエチオピアでファミリーガーデン(家庭菜園)を作ったり，村の人々（子供も含めて）に緑がいかに大切かを訴える芝居の脚本も書いている。日本の印象は「日本人は皆忙しそう。私は東京のようなゴミゴミした大都市は好きではない。もっと日本の田舎に興味がある。東京とマーシャ村では，何もかもあまりに違いすぎて何の比較にもならないから」という。マーシャ村での活動に役立ちそうな事を少しでも日本から探していきたいという感じだった。(K)

エシャトー(左)とダニエル(右)

国際協力の日・NGOと市民の集い

10月6日，国際協力の日にお茶の水スクエアでNGO活動推進センター主催『NGOと市民の集い』が開かれた。年額一兆円を超え，世界最大のODA供与国になろうとしている日本において，NGOの果たすべき役割とは何か改めて考えようというのが今回の集会の主旨である。東和大学教授の室靖先生のODAその他に関する基調報告の後，柿澤弘治氏(自民)，中西珠子氏(公明)，水田隐氏(社会)，荒木光弥氏(『国際開発ジャーナル』編集長)，吉田志朗氏(NGO活動推進センター理事)がパネリストとして参加した。司会進行は，JVC代表でNGO活動推進センター副理事長の岩崎駿介氏。

非公式な場ということで，ディスカッションもなかなか白熱して，どちらのいうこともっともだなという気にさせられてしまった。ODAに対する政府サイドの意見は，普段あまり聞けないと思うが，(今回は柿澤氏の個人的な見解)，「いきなり経済大国となってしまいODAの量を増やすのが精一杯で，質の方はこれから考えていく段階。GNP比何%ではなく，国民の何%が海外援助に携わったかが大事。また，そのような人達の経験を重視して雇用制度も考えていきたい」ということだった。開発援助に関しては日本はまだまだ後進国のようだ。(K)

訂正とお詫び

1989年度JVC年次報告書中の1988年度「支援団体一覧表」の団体欄と金額欄に関して，私達の事務上の手違いにより誤りがありました。
「浄土宗東京教区青年会　1,800,000」を新たに記入させて頂き，
「浄土真宗本願寺派　4,000,000」を「2,200,000」に訂正させて頂きます。両団体にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。

JVCプロジェクト

1989年9月25日　現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計，総務，情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会－毎月第1月曜日　午後6時～8時 毎月第2，4土曜日　午後2時～4時	全国社会福祉協議会	岩崎駿介（代表） 林　達雄（事務局長） 熊岡路矢，星野昌子， 前川昌代，鴇田三芳， 加藤志保，岩崎美佐子， 富安光子，池島千津子， アイネス・バスカビル
神奈川県 （JVC神奈川）	神奈川県内における渉外，事業計画，情報収集，資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画，運営。		山口誠史，
日本国内	**●定住難民プロジェクト** ドナーであるケアハウスさくら苑の秋祭りでSVA（曹洞宗ボランティア会）と共に「難民のことを知るコーナー」を担当することに決定。当日（10月22日）に向けて準備中。 10月15日開催のポートウォークよこはま'89のフリーマーケットに定住難民プロジェクトとして参加決定。現在カンボジア人をリーダーにカンボジア料理出店を企画中。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金，国際交流ホスピタリティトラスト，日本少林寺拳法連盟，ケアハウスさくら苑 チャリティーカレンダー	小野豪大，他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている“さかさま農園”や山武ボランティア協会などと，毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア （ウォロ州）	**●総合的復興促進（マーシャ）** 1. 植　林 山間部斜面での苗木の植えつけが終わった。女性たちが苗木を運び，男性たちが植えつけた。 2. 母子保健・栄養 1月からお母さん学校を始めているアダグイヤ地区で栄養調査を行ったところ，体重身長比で70％以下の子供が20％近くいることがわかり，集中的に家庭訪問指導を始めた。今さらながらにエチオピア村落の健康状態が劣悪なことが確認された。 3. エチオピア人スタッフの日本訪問 9月5日にエチオピア人2名が来日し，植林の意義を伝える寸劇などを用い，各地で活動報告を行った。エチオピアの目から見た日本の姿が，私達自身の暮らしの問い直しに役立った。 ★エチオピアスタディツアーが，2月9日～20日に決定！　どうぞご参加ください。	CRDA，WFP，犬養道子・みどり一本運動，モラロジーMIRC，東京グリーン・ウォーク，西本願寺，チャリティ・サイクル，Tree for lifeの会，中部善意銀行，朝日新聞厚生文化事業団，毎日新聞社会文化事業団 チャリティーカレンダー	鈴木直喜，山田　盛， 江原浩昭，江原広美， 田尻真由美，イエットベルク，ソロモン，バレタ，ダニエル，エシャトー，トーマス，シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ （ゲドー郡） ハルバ・キャンプ （ゲドー郡）	**●農業による自立促進** 8月31日，ルークの治安悪化がさらに進んだため，JVCではソマリア人に活動をまかせ，日本人全員にひき続き全ての外国人がモガディシュに避難してきた。現在に至るまで外国人は誰もルークに戻れていない。この為，8月から活動が遅れぎみである。マガネイ難民キャンプ内の育苗センターは，難民達の自主運営に移管した。またモデル農場の養鶏活動は終了した。ユニット14農場では，農具代のローンを全額一度にJVCへ返却したが，このように約束どおりに返却する農場は多くない。	UNHCR， 仏国土をつくろう会	金子一弘，シアッド，ムハボ， 磯田厚子，中野周二，羽田尚由，アオキ，アブディナサル，ヒレ，ラシッド
ジャララクシ・キャンプ （ヒラン郡）	**●農業による自立促進** ここの治安も悪いがルークほどではなく，今は日本人スタッフも月の半分くらいは現地で活動している。今月はメカニックの中野も現地に入り，ポンプのメンテナンス等の指導を行ってきた。しかし，今後の治安の推移を注意深く見守っていく必要がある。	UNHCR R.I.-Japan	船川秀夫，シュクリ
カンボジア カンポット県 プノンペン カンダール県	**●サンタピエップ技術学校／ワークショップ** 87年8月から現在まで6台のトラックのエンジン・オーバーホールを終え，現在そのうち5台が稼動中である。ほかにブレーキを中心とした中程度の修理が約20台，熔接や塗装などの修理を入れると約150台のトラックの修理を行ってきたことになる。 カンボジア人スタッフは現在32名おり，その中には技術学校の第一期卒業生13名が含まれている。 第二期の授業は88年11月から一年間の予定で開始された。生徒はスタッフ23名で，孤児2名を含む。教育省より送られた2名は勉強を終えプルサットへ帰った。7月初めから，機械工，板金工，訓練生合計5名が新たに加わった。スタッフ等25名が4つのグループに分かれ，日本人技術者の指導のもとに実習をかねた車の修理を行っている。 8月下旬より新しいメンバーのグループを中心に理論の学習を始めた。また，三菱の部品が着き，訓練生を中心にしたグループからエンジンのオーバー・ホールを始めた。 今年度の目標は，生徒が実習の経験を十分に積めるようにするため，エンジン，車体すべてのほぼ完全な修理を20台以上行うことである。そのため，トラック10台分の新品のスペアパーツ，パッキン等，定期交換部品10台分が必要とされる。 **●RINE（ライン）プログラム〔母子保健活動〕** プノンペン郡RINEセンター責任者の助産婦が，7月31日より2週間，母子保健局主催の指導者養成コースに参加した。彼女が中心となって，村で活動する助産婦を対象に1カ月の訓練を10月2日より実施する。第2回目の巡回母子保健活動(Mobile RINE)は7月14日に開始し順調にすすんでいる。6月2日に着工した新産科病棟は，9月29日完成した。 **●井戸掘り・給水** 今年の計画は，30本の井戸を掘ることである。今までにプノンペン市内で7本，カンダール県内で10本（そのうち1本は水源に行きあたらなかった），コンポン・ソム市で6本の合計23本の井戸が掘られた。 9月末はプチュンバンといい，日本のお盆にあたる。それをプノンペンで過してから，10月初めにカンポット県に行き，5本の井戸掘り活動が予定されている。	創価学会青年平和会議，モラロジーMIRC，立正佼成会，日産労連，西本願寺，善興寺ダーナ基金，高岡寺族青年会，覚法寺，「チャリティ・ウオークかながわ」，日本少林寺拳法連盟，毎日新聞大阪社会事業団，大竹財団，東京都社会福祉協議会，国際ソロプチミスト千代田，明るい社会づくり運動神奈川県協議会，浄土宗東京教区青年会，和平基金，国際保健協力市民の会（SHARE）仏教救援センター，四日市商業高校，日蓮宗宗務院，横浜市「世界ふれあいキャンペーン」，「お告げのフランシスコ姉妹会」，日本海事センター，中部善意銀行，「カンボジア会」，チャリティーカレンダー，堺市ロータリークラブ，日本ボーイスカウト広島第20回	古西　勇，馬　清，杉江美子，本橋　栄 〔カウンター・パート〕 （運輸省） タック・カン，アム・ディエン，メアス・サメット，ゲット・ソーン，カム・ボラ （保健省） アン・サルン医師 （カンダール県保健局） ニム・ニエム医師 （農業省水利局） セン・ロー 全日本仏教青年会，カリタス・ジャパン，「第1回チャリティー・コンサート」，我孫子「ムダの会」

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
タイ バンコク事務所	①総務，会計，資金調達 ②各機関（国連，タイ政府，日本大使館，各国民間援助団体）及び東京事務所，ラオス・カンプチアを含む，各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集，広報活動 ④在タイ日本人との連絡調整 9月8日〜10日，カンチャナブリにてミーティングをもち，タイJVCを財団とする可能性を検討した。9月23日，日本人会のバザーがあり，JVCからは主婦ボランティアの方々が参加した。	全国社会福祉協議会 電力労連	ポンピモン，カモン，大石道子，チャタヴァデ 主婦ボランティア15名
カオイダン （カンプチア難民キャンプ）	**●西崎憲司記念技術学校** 現在，180名の生徒が一気筒エンジン，単車，自動車，溶接，大工などの技術訓練に励んでいる。1990年度のプロジェクト・プロポーザルをUNHCRに提出した。タイ政府の方針の変化で避難民をバン・タットからカオイダンに移動させて，トレーニングを受けることが可能になりそうなので，バン・タット・サテライト技術学校の開設は中止。来年もカオイダンのみで行う。また新しい試みとして今までJVCでトレーニングを受けた卒業生を対象にした短期間の発展トレーニング・クラスを始める。	UNHCR，SV（Stichting Vluchteling）	ソムヨット，清水俊弘，スティ・ネップラコン
パナニコム （第三国定住待ちキャンプ）	**●日本語学校** ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育　②日本文化・習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム 8月，PCセンター内に新たに造られたベトナム難民の居住区“Sセクション”に，バン・タット・キャンプより移送されてきた3月14日以降の難民が9月初め移された。現在，2291名が収容されスクリーニング（難民資格審査）を受けている。 生徒数　カンボジア　22名　ラオス　0名 ベトナム　1名　計23名	天理教千葉 R.I.-Japan	鈴木由子，竹村雅義，熊沢ゆり，久津輪雅，岩嶋寿美子
地域開発（CD） （バンコク市内のスラム地区） （ブリラム県のM村）	**●奨学金プロジェクト** 89年度から支援する新しい児童のレポートを作成，翻訳・発送している。 **●クロントイ図書館** ロック6，クロライのミニ図書館の本の入れ換え。9月20日より週3回ベルギー人のMr. Jonによるヨガ指圧コースが，スラムで活動するNGOスタッフを対象に開かれている。（10月6日まで） **●スラム生活改善プロジェクト** NGO間のセミナー，ミーティングなどに参加。 **●農村開発** ブリラム県M村で多角農業の奨励，学校での指導。 **●その他** 9月2日，全日本社会福祉協議会のメンバーを中心とした一行がCDの活動地を訪問した。	モラロジーMIRC，Tree for lifeの会，雄勝町町内寺院会，国際ソロプチミスト駿河，長谷川勉チャリティーウォーク，JOFIC，電力労連，からし種，チャリティーカレンダー	ワティット，サムルアイ，リーラ，コメン，今泉恵，ガームシン
ラオス （ヴィエンチャン県 ボーリー・カムサイ県 カンムアン県）	**●生活改善指導員養成プロジェクト** 6月22日，第一回養成コースがスタート。現在，ヴィエンチャン県をはじめ，4つの市，県から集まった27名の研修生が，センターと出身の村とを往復しながら講義と実習を重ねている。研修生が地方で母子保健を中心とした普及活動を始める10月20日以降，JVCの看護婦が巡回して，実践指導を行う予定。	UNDP 庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 横浜インターナショナル・ウイミンズクラブ	谷山博史，前田初江，北詰秋乃 スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺，聖ヨゼフ老人ホーム，堺市ロータリークラブ，老人ホーム天寿荘，チャリティーカレンダー

Trial & Error（試行錯誤トライアル・アンド・エラー）第94号
発行日　1989年10月20日発行（毎月20日発行）通巻94号
1982年8月16日第三種郵便物認可

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは－Japan International Volunteer Centerは1980年2月，タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの，インドシナ難民の大量流出をきっかけに，日本から駆けつけた若者と，現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり，現在の組織の原形ができました。JVCは，活動者の自発的な意志に基づき，日本の個人・団体からの寄付金，国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは，人種，国籍，習慣，宗教その他の信条の違いを越えて，難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について ── 会員は，総会に出席し，JVCの方針などを決定する他，情報・資料の入手，各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

・正会員（一般会員　10,000円　活動者会員　3,000円
　　団体会員　30,000円　学生会員　3,000円）
・賛助会員　金品による支援（金額は自由です。）

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について
・毎号1冊送付　年間購読料　3,000円
・毎号4冊送付　年間購読料　10,000円

▶送金の方法 ― 下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
①会員：東京5-48365　加入者名－JVC会員係
②T/E：東京3-54186　加入者名－JVC東京事務所
（住所，氏名，購読開始月をお書き添え下さい。）

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動 ── 救援活動をより充実させるため，以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

A. アフリカ難民救援募金　（9月小計　21,100円）アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。

B. グリーン・フォー・アフリカ募金（9月小計　241,721円）アフリカの土壌回復，農業，植林等に使われます。

C. インドシナ難民救援募金（9月小計　3,100円）タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。

D. カンボジア募金　（9月小計　664,100円）カンボジア国内の復興のために使われます。

E. タイ・スラム募金　（9月小計　361,621円）バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。

F. スラムの子供奨学金・基金（9月小計　112,100円）バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。

G. タイ農村募金　（9月小計　5,000円）タイの農村開発のために使われます。

H. 定住難民募金　（9月小計　5,000円）定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。

I. JVC運営経費募金　（9月小計　0円）現場を支えるのに不可欠な事務運営経費，人件費に使われます。

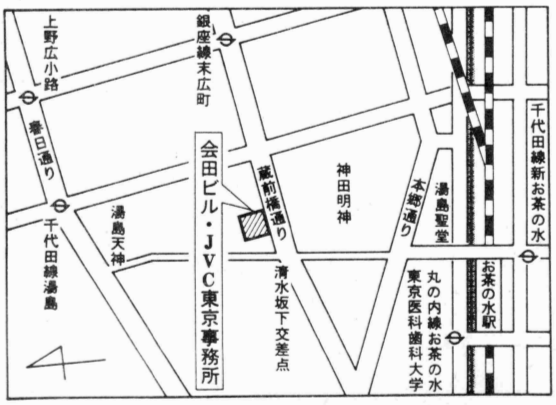
J. ラオス募金　（9月小計　181,000円）ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。

K. 無指定募金　（9月小計　188,270円）

▶送金の方法－下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9－27495（募金種目名をご記入下さい。）
加入者名－JVC東京事務所

編集後記

▶11月11・12日，新潟市の10以上のボランティア団体が協力してJVCラオス支援のバザーが開かれる。彼らは自分たちを勝手連と呼んで新潟とラオスを結ぶ独自の活動を展開している。同じような運動は山形，高岡，稲城，国分寺各市でも動き出している。中央と地方の系列化に反発して地域独自の国際協力を目指した動きとして注目される。（谷）
▶えっ／編集作業ってこんなに細かい仕事だったの，これはシメてかからねばというのが正直な感想。前川さんが産休の三カ月間，広報を担当することになりJVCの活動内容や方針，基本的知識を勉強できるよい機会が得られました。ご迷惑をおかけします。よろしくお願いします。（池島）



犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497　（9月小計181名　1,746,930円）

犬養道子さんの御厚意により，JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年10月20日発行（毎月20日発行）
編集人　谷山博史　池島千津子　前川昌代
発行人　林　達雄
発行所　日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒113　東京都文京区湯島3－1－4　会田ビル5階
☎03（834）2388　FAX：03（835）0519
Telex：7604025　JVCHQ UC
神奈川事務所　〒231 横浜市中区山下町2　産業貿易センタービル9F　㈶神奈川県国際交流協会内　☎045（671）7082
印刷所　（株）ベスト・プリンティング
＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価　送料共300円